

二葉むさしが丘学園 10年のあゆみ

～子どもとともに、地域とともに～

二葉むさしが丘学園

はじめに

社会福祉法人二葉保育園の120周年となる「令和」最初の年、二葉むさしが丘学園は東京都からの運営移譲後10周年を迎えました。この機会に、この10年間の実践を「礎づくりの10年」として振り返り、実践の成果を共有し、さらに発展していくための「これからの挑戦」を明確にします。二葉むさしが丘学園は、社会的養護における「子どもの最善の利益」「すべての子どもを社会全体ではぐくむ」を実現する社会にむけて絶え間なく前進していく役割に応えていく全職員の確認とするためにこれをまとめます。

1. 二葉むさしが丘学園の概要

小平市にある二葉むさしが丘学園は本園定員60名、グループホーム3か所、ファミリーホーム1か所の4つの分園を合わせて総定員84名の施設となっています。

本園は各室(ユニット)6～8名の児童で構成され、2室(ユニット)を1寮としたグループとなっています。本園には4つの寮があり、1寮あたりの職員数は6名が基本です。そのほかに、親子交流室、自活実習室2室を持っています。都立から引き継いだため、民間では珍しく、広い敷地と体育館もあります。

グループホームは小平市内に3か所あり、概ね本園から2キロ以内のところにあります。児童の定員は6名で、職員は、各グループホームに3名ずつと、全体(ファミリーホーム含む)で2名のグループホーム支援員で担当しています。ファミリーホームには職員夫婦とその家族、そして6名の子どもたち(現在は5名)が生活しています。

二葉むさしが丘学園は、10年前平成22年4月に東京都から民間移譲され、その1年前の引き継ぎから二葉としての歴史は始まります。

当時、都立施設改革の一環として、都立児童養護施設について都は数か所の民間移譲を計画しました。二葉では、今後の社会的養護に大きな役割を担う上で、複数の施設と都立の設備を持つことはとても大きな魅力でした。

移譲期は、子どもの生活はそのまま、大人がすべて変わるため、子どもたちが一番混乱した時期でした。「移譲を受け入れられない子どもたち」

に、大人の「思いや気持ち」を伝えること、「子どもたちを信じて」繰り返し伝え続けることによって、生活を共に作っていくことに奔走しました。

最初の3年間は、移譲後の子どもたちの生活について、アンケート調査を実施しました。その結果を丁寧に第三者委員の方に見ていただき、子どもたちの意見を大事にしながら、「ともに生活を作る」ことに生かして取り組んできました。10年前の第三者評価では、子どもたちの施設満足度が3割程度でしたが、年々満足度は上がり、この数年は8割、9割を超える数字となっています。

2. 移譲後の大きな取り組み

(1) 本体施設の改築

本園の改築は、社会的養護をリードするにふさわしい、新たな出発の基地作りです。

今後長く働き続ける若い職員を中心に改築検討委員会「未来日記プロジェクト」を立ち上げて取り組んできました。都内に限らず、さまざまな場所の施設見学や情報収集をして、自分たちの目指す養護が出来る建物づくりを目指しました。

子どもたちとともに目指したのは、「みんなが安心して自分らしくいられる家」「アドボカシーの実現できる家」「みんなが繋がれる家」「壁のない家」「地域とのつながりを大事にする家」でした。子ども達からは園庭の遊具についての要望も出されそれを基に遊具を設置しました。

(2) グループホームの開設

都立時代は「落ち着いた生活の場所」というよりは「園外での体験を目的とした寮」が1か所ありました。生活の場であるグループホームとして整備しました。グループホームの必要性は、二葉学園が、全国でも先駆的に取り組みその後も育んできた実践で証明済みです。移譲2年後に最初のグループホーム「立山」を、翌年2つ目「榛名」、そして、現在は「楓」を含めた3つのグループホームで子どもと職員が生活をしています。

国や東京都の方針によっても、施設の「小規模化かつ地域分散化」は明確で、今後もグループホームは増えていく方向です。二葉むさしが丘学園でも、本園の小規模化を図るため、新たなグループホームの開設を検討しています。子どもたちに

にとって必要な「家」となるために、二葉らしいグループホームのあり方を追い求める礎となっています。

(3)ファミリーホーム「しろやま」の開設

二葉では昭和 56 年、約 40 年前に、今で言う「法人型ファミリーホーム」を実践しています。

平成 28 年の児童福祉法改正で、「家庭環境と同様の環境での養育」が子どもの権利として明記されました。それに応えるべく、法人の責任でファミリーホームを安定的に運営する取り組みです。40 年前の 2 つのホームと同様に、実子とともに住み込み、家庭に近い形で養育していきたいと言う職員夫妻を中心に進めています。市内にファミリーホームのための建物を新築して生活する「家」です。担当する職員夫婦は、「家庭的養護が重要視される昨今、一般家庭に近い環境での支援に挑戦したいと考えるようになりました。しかし、実際にやってみると、理想と現実の差と難しさを痛感しています。委託児童と実子（年長、年少の兄弟）との関係性も、交流の機会や時間が長ければ親密になるわけではないですし、また住み込みの運営者として勤務と休日の切り替えも工夫が必要だと感じています。ですが、開設して半年以上が過ぎ、児童が『この野菜がいやだ』など生活の不満を話すようになり、担当心理士から『馴染んできたのが分かる』と言われるようになりました。部活の試合の応援など、ファミリーホームだから挑戦できることも実感しております。私は『二葉保育園』というこの法人の職員だったから、法人型ファミリーホームを挑戦させてもらえたと思っています。これからもみなさんのお力を借りつつ、挑戦を続けていきます。」と話しています。二葉学園時代から培った取り組みが「二葉むさしが丘学園の重要な礎」として花開こうとしています。これからも安定的な運営ができるよう、事業所ならびに法人一体となって支えていきたいと考えています。

(4)「一時保護委託事業」の開始

虐待などで保護を必要とする子どもを受け入れる「一時保護」の施設の不足は、東京では深刻となっています。悲惨な子どもの虐待死が大きな社会問題となる中、児童養護施設の役割を果たさなければなりません。

「必要な子どもたちがいる。」「必要なことには取り組む」は、120 年前から引き継いできた「二葉の精神」です。近隣の小平児童相談所に一時保護所がなく、平成 28 年一時保護委託の定員を 6

名として取り組みを始めました。これ以前にも二葉むさしが丘学園として、定員に空きがある時には一時保護委託を積極的に受け入れるよう取り組んできました。これは子どもの命を守る事、児童相談所への協力と位置付けていました。

施設措置を要せず、一時保護から早期に家庭復帰が見込まれる児童を対象としての施設で行う新しい子ども家庭支援であり、今後可能性を広げる礎になる取り組みであり、以下に詳しくまとめました。

①事業の機能と役割

- ・親子関係調整の必要な家庭への予防的な支援として機能。
- ・子どもたちにとっては、あくまでも一時的な生活の場として保護解除後の生活を見据えた支援の機能。
- ・緊急ケースもあり受容と心身のケアも含めた安心安全を確保する役割。
- ・子どもたちとの生活は約束を尊重し、お互いの安心と安全を守る生活の実感をとおして、育ちを支援する役割。

②生活の実際

- ・生活の約束(意識して大事にしてほしい3点) プライバシーの確保、権利保障、トラブル防止。よく話を聞き、友達関係を大事に話し合う生活。

③事業実施の結果

表 1～表 3 に示したとおり、その社会的必要性は、利用実績が示しています。

表 1 . 一時保護月別依頼件数平成 30 年度

月	4	5	6	7	8	9	10	11
非入所	3	6	26	27	6	7	48	18
入 所	8	5	2	4	3	4	7	2
合 計	11	11	28	31	9	11	55	20
月	12	1	2	3	合計	総計		
非入所	24	27	56	32	280	330		
入 所	2	3	5	5	50			
合 計	26	30	61	37	330			

依頼の件数は年 300 件以上にのぼり、受託の延べ日数は 1800 人日以上、一日あたりの平均利用者数も 4.9 人(下半期に限ると 6.12 人)という数字になっています。令和元年度については、さらに数字が伸びて、受託の延べ日数は、2000 人日を超える勢いとなっています。

表 2 平成 30 年度 利用者数・平均保護日数

1 日当たり平均利用者数(人)	4	5	6	7	8	9	半年平均
	2.3	2	5.6	3.5	5.3	3.7	3.8
	10	11	12	1	2	3	年間平均
	6.3	7	5	4.3	6.5	8	4.9
1 人あたりの平均保護日数(年間)							36.04 日

表 3. 4 年間の受託人数と日数

年度	H28	29	30	令和 1(1 月末現在)
受託人数(人)	45	34	50	38
延べ受託日数(日)	1652	1597	1802	2019

利用した子どもたちの声では、「毎日が楽しかった。」「友達ができた。」「家ではゲームとか携帯ばかりやっていたのにここに来てからやらなくても平気だった。でも、早くゲームしたいけどね。」「話聞いてもらえるのが嬉しい。」「ご飯がおいしい。」「勉強がいやだ。」「(平日は午前中に学習時間があるため) 土日になると今までの人生で一番幸せを実感できた。」「学校に通い続けられてよかった。」「保護されるのは不安だけど、またここで(保護されて)よかった。」など施設が一時保護の場として受け入れられていることを示しています。

児童のケースから言えることは次のとおりです。

- ・緊急ケースがほとんどのため依頼が来たら空きがある限り、受け入れ続けているのが現状だが、何度も繰り返し利用することで家族生活の維持が可能となったケースがあり、機能と役割の効果が見られました。

- ・児童相談所の一時保護では、3 つの権利を全て保障することは困難だが、生活の場所としての保障、学校等へ通うことの保障、住み慣れた地域の傍にいるという安心があり、一時的に保護する場合の優位点を、子どもの声からも確認できます。

- ・退所後、私たちのことを思い出して、近況報告や進路相談に訪れる子もあり、地域の子育て支援の新しい可能性を示しています。

③ 今後の課題

4 年間の実績は、今後の課題も示しています。

一時的な保護のため、計画的な支援が難しいことです。緊急一時的支援の計画的な内容の検討と充実は大きな課題です。また、生活の中での具体的な支援としては以下の二つが課題です。

- ・余暇支援⇒年齢や性別が多種多様なため、集団

での実施が困難な場合が多く、個々の成長や発達課題に合わせた個別の余暇支援を検討していくことが求められます。

- ・学習支援⇒学力の程度の見極めながら行なうため、プリント学習を中心に繰り返す学習を行なうのが現状となっています。学習教材の準備や学力の見極めが職員個人の力量に任されているなどの負担が大きくなっていることや発達課題のある児童への支援です。学習への抵抗感を減らし、意欲的に取り組める方法を探っていくことや学習機材などの充実も求められます。

- ・利用児童の先の生活につなげていく為に、安心安全のひと時にとどまらず、一人ひとりの子どものストロングポイントを認識し、伸ばす取り組みを探求する必要があると認識しています。

(5) 自立援助ホーム「トリノス」の開設

児童養護施設での働きは必然として退所後の支援に課題が行きます。この課題に二葉学園との協力の取り組みとしてチャレンジしてきました。その結果、法人の事業の中で、0 歳から成人前までの子どもたちへの支援が途切れる事なく出来るようになりました。開設に当たっては、二葉むさしが丘学園から 3 人の職員が異動し、現在も熱意をもってその道を切り開いています。この具体的実践は「トリノス」の実践報告に委ねます。

3. 子ども達への期待とともに作る生活

二葉むさしが丘学園の理念は 4 つです。そして、子どもたちとの生活づくりでは、次に示した 3 つのことを大切に実践してきました。これからも引き続き重要な実践課題です。

四つの理念は、職員で話し合っただけで定めました。

- ①子どもが健やかに育つ社会を作る活動をする
- ②話し合いの文化を育て、子どもとともに生活を作る
- ③子どもが権利主体として自分らしく生きる力を育てる
- ④自らを高め社会のニーズにこたえられる職員を目指す

(1) 安心安全の生活

どんなことでも相談でき、苦情が言える。アドボカシーの保障は、子どもたちの安心安全な生活にとって必要不可欠です。苦情が言える、丁寧に扱ってもらえることが安心・安全につながります。

子どもからの苦情や意見は、今年は 40 件以上になります。中には子どもの部屋に住む、ぬいぐるみの「こぐたん」からの可愛らしい投書もあり

ました。

苦情受付は子どもの話をよく聞き、一緒になってその解決策を探ります。職員が解決するのではなく、お互いに自分たちが出来ることを探っていくのです。その時だけでは解決には行きつかず時間をかけて話し合っていく事も多くあります。定期的な第三者委員会ですべての苦情や意見を確認して進める実践は定着しています。

(2) 話し合いの文化づくり

話し合いプロセスを大事にした文化の構築を進めてきました。その基本には、子どもを信頼し期待するということが不可欠です。それを適切に伝えられる職員集団を目指してきました。

各寮の児童と職員で行う子ども会議は、部屋ごとにその時々話題や出来事について話し合いを行っています。議題は起きる時間やテレビの時間、困っていることなど様々です。自分たちで生活を作っていくようにしています。学園で統一したルールは出来るだけ少なくし、自分たちで心地よい生活を作っていくようにしています。

また園全体にかかわる問題などは児童会などで話し合われます。次はその一例です。

消費税が増額された時には子ども達から「おやつ代を値上げして欲しい」と意見が出てきました。そして、児童会からは大きな子ども達の意見を中心にした提案が挙がってきました。職員会議では児童会に対して小さい子の意見が反映されていないと心配を伝えました。その結果、再度児童会で話し合いが行われ小さい子の意見も含めた提案として、おやつ代値上げのためのみんなの約束で、次の3点でした。

- ①毎日ごはんを残さず食べる
- ②部屋を掃除してからおやつ代をもらう
- ③一週間に一度職員を褒める

ということでした。①②は、普段から大人が子どもに伝えていることで、③は大人としては不意打ちされた提案でした。子どもの提案に至るまでのプロセスを大事にして話し合っていくことの大切さを伝えていきます。

上記のような児童会からの提案を含め、職員の話し合いはまず寮内の寮会議に出されます。そこから提案された内容は、各部署の代表者による運営会議で精査され、承認されたものが、全職員参加の職員会議へと提案されます。そこで承認されたことは、学園全体の合意として全職員が責任を持って実行します。この大人側の共通理解のプロセスをしっかりと持って、子どもの意見に寄り添う

ことで、学園における「話し合いの文化を創っていくこと」の実践が一步ずつ進んでいます。

(3) 地域の中の二葉むさしが丘学園

「オープンカフェ」「青空祭り」は二葉むさしが丘学園を地域の方に知ってもらうために始まりました。オープンカフェは毎回違うテーマで地域の方を招いてゆったりと学園の事、子どものこと、里親の事、地域の事、など社会的養護に関する事を多岐にわたって話しています。講師を招くこともありました。お茶を飲みながらこれまで平成27年から延べ30回開催しています。

青空祭りは移譲を受けた年から始めています。子どもたちの学校の友達や先生、地域の方たちなど、毎年200名を超える人たちが来てくれています。バザーやステージでの催し物、出店などを行い一昨年は改築終了を記念して餅まきをしました。地域の老人ホームとの交流をして子どもたちがステージで歌を披露したり不登校児のボランティアの受け入れをしてもらったりもしています。また地域の父の会などとも交流を持って、家庭菜園のお手伝いなどを行っています。地域との関係も着実に進めてきています。

4. これからの二葉むさしが丘学園

(1) これまで大切にしていたことを継続し発展させる取り組み

まずはこれまで学園が大切にしてきたことを継続、発展させていく事。今までと同様に子どもたちと生活を作る事を続けていながら二葉むさしが丘学園の文化や伝統を築いていくことです。

その中心は、すでに述べた「安心安全の生活」「話し合いの文化の構築」「地域に開かれた施設」で、今まで取り組んできたこれらのことを確固たる礎として、着々と積み上げていくことこそが、私たちが継続すべきことなのだと考えています。

(2) 社会的養護における二葉むさしが丘学園の役割を意識した取り組み

子どもに必要な社会的養護に果敢に挑戦する二葉むさしが丘学園であること。新しい社会的養育ビジョンなど社会のニーズに応えながら、子どもたちに必要な社会的養護を様々な形で追及し、子どもたちとともに作る役割に挑戦する事が求められていると思います。

小規模化かつ地域分散化の課題には、ただグループホームを増やすだけでなく、それぞれのホームが社会のニーズや入所児童の多様性に対応する

ために、どんな方針で運営していくのか、また、本園の果たす役割は何なのかを考え、地域や関係機関とも連携した施設運営を目指して取り組んでいきます。

多機能化、高機能化の課題には、一時保護含め、ショートステイや居場所支援、サテライト型児童養護施設の開設など地域の子育て支援にも積極的に参画しながら、ソーシャルサービスとして目指す姿を模索していきたいと思えます。

法人内の連携により、社会的養護を総合的に進め、必要な内容を創出していく役割を担います。

(3)変化する勇気・新たな事へチャレンジする取り組み

話し合いの文化、フラットな関係での協力・支え合う協働の力で、チャレンジを続け「安心の基地としての家」を追い求めて行きたいと思えます。

確固たる礎を土台とし、その上に多様なニーズに応じたサービスを展開することに、積極的に取り組んでいきます。

① 働き方改革への取り組み

最近では職員の働き方改革など、働きやすい職場づくりを目指して、検討を重ねてきました。公休の取得状況の改善や長期(1週間)休暇の実現、育休明け職員の職場復帰などの成果を上げることができました。今後は超過勤務の削減やさらに多様な雇用体系の創出などにも取り組み、働きやすい職場づくりを目指していきたいと思えます。職員が元気に働ける環境でないと子どもの元気な生活と成長・発達を守り保障することはできません。

② 新たな養護体系の創出

前述の「新しい社会的養育ビジョン」や国の示した方向性に呼応しながら、これからの新たな社会的養護の体系を模索していきます。そして地域を巻き込んだ新たな子育て支援体制や災害時の協力体制など、新しい児童養護施設のあり方について、検討推進を続けます。

今まで10年間大切にしてきた礎を積み重ねていくことで、どんな変化にも動じずに安心して対応することができるのだと思えます。そして、臆せず新たなことにチャレンジしていく姿勢と失敗を糧とするレジリエンスが実現できるよう、あきらめずに取り組んでいきたいと思えます。

私たちは子どもたちにどんな大人になってもらいたいのか、どんな養護をしたいのか、しなければいけないのではなく何がしたいのか、何を体験してもらいたいのか、何を一緒に体験したいのか、

共有したいのか、それを追及していきます。そして実践し、振り返りをして一つ一つの実践を積み上げていきたいと思えます。地域との繋がりも、求められる施設像もあるがやはり子どもたちをどう育てていきたいのか、そこを中心に考えていく事が大人にも子どもにも大切な事ではないでしょうか。

おわりに

10年前を振り返ると、「今にして思えば」と感じる事が多々あります。二葉むさしが丘学園がスタートを切ったとき、職員の数は現在の2/3ほどでした。

子どもたちの人数も1.3倍に増えています。毎年のように新たな事業に取り組み、落ち着いて振り返ることもなく、前だけ向いて突っ走ってきたように思えます。そんな中、今回このような機会を頂いて振り返りができたことは、私たちにとってとても有意義なことだったと思えます。

黒田前施設長を中心にして、みんなでがむしゃらに進んできたこれまでの10年間は、いわば礎、基礎となる土台作りの10年間だったのだと感じます。

そして、これから先の10年間はその基礎の上に、本当の意味での新しい施設を建設していくことになるのではないのでしょうか？

一昨年8月の台風で、都立の時代(二葉むさしが丘学園の開設前)から満開の花を咲かせてくれた園庭のさくらの木が一本倒れてしまいました。長い間子どもたちと施設を見守っていた2本の桜の木のうち一本がなくなってしまったことは、少なからず児童・職員にショックを与えました。そして、私たちは、倒れてしまった木のかわりに新しい若木を植えました。

この木の生長に未来を託して、これから先どんな花を咲かせ、どんな木に育っていくのか見守っていききたいと思えます。そして私たちの養護や子ども達を見守ってくれることでしょう。

10年間の皆様のご支援ならびにご指導、ご鞭撻に心より感謝申し上げますとともに、これからも引き続き見守っていただきますことを切にお願い申し上げます。これからも、二葉むさしが丘学園は、桜がこの小平の地に根を張って、大きくなっていくように、皆様とともに地域に根ざした、子どもたちのニーズに応え、成長を支援する施設となるべく、あきらめず挑戦し続けたいと思えます。